

に基いている。宗祖が今、「教は則ち大無量壽經也」といつて、往相回向の外に置いたのは、教主世尊を善知識と仰がれたからである。かくて略本は安心に就くから善知識を重んずるのであり、因願よりは成就に基く略本の説明もこの點から理解せられる。

二には略本が行中經攝の所明を持つということである。略本を廣本以前の撰述とし、略本を原型として廣本に發展したと主張する人々は、廣本が四法法門であり、略本は三法々門であると決定して、そこから論證を立てようとする。然し、三法か四法かで兩本の性格を決定することは困難であつて、もつと率直に兩本の特色を考へねばならない。蓋し廣略二本は、之を二法としても、又四法としてもどちらでも理解することができる。

然し、率直な兩本の異りは、廣本が行信別開の所明であり、略本は却て行中攝信の所明だということである。即ち廣本は内題に顯淨土眞實教行證文類とあつて三法を擧げているから、三法法門ともとれるし、また教行信證の四法は卷を異にし、殊に信卷には別序さえ置いているのであるから、四法々門とも理解できる。従てこれを三法々門か四法々門かでその性格を決定することは至難であるが、三法を内題に掲げつつ四法をあらわし、特に「信卷」を開いて別序を置き、この信の一法が眞假批判の根據となつて、却つて信別開というところにその特色を見出すことができる。之に對し略本は、廣本と同じく、三法々門とも四法々門とも見られるが、その全體の構成からは却て元祖相承の二法々門であり、少くも行中攝信の所明であることは動かすことができない。そしてかくの如き兩本の性格は、廣本が教相

を主とするからこそ、眞假を批判する信の如實不如實が要とせられるのであり、略本は安心を主とすればこそ、念佛の行が要となつて、そこによき人の仰せをあらはすこととなる。かくて略本の性格は安心を主として、元祖相承の念佛を明かにせんとして撰述せられたものであり、その撰述意趣は廣本の原型でもなければ、略鈔でもなく、全く獨自なものであつたと思はれる。こうした内容理解から、略本の撰述年次も考へられねばならぬのであつて、少くも略本が晩年の撰述であることは動かすことができないのではないであらうか。

### 明恵上人の三寶禮について

藤 島 達 朗

明恵上人(一一七三—一二三三)に「三時三寶禮釋」「自行三時禮功德義」各一卷の二部の著述がある。それぞれ奥書によれば前者は建保三年(一二二五)十一月廿五日、後者は同四年十月五日に成つてゐる。これらは上人が建保二年の頃から、その學問處である梶尾西山練若臺の草庵に、三寶(佛・法・僧)と菩提心の名字を書いた軸をかけ、三時に禮拜したそのことを解釋し、併せてその功德を説述したものである。現に梶尾高山寺にはその上人の眞蹟本を二軸藏しているが、ついでみれば次の如くである。先ず中央に「南無同相別相住持佛法僧三寶」と同相・別相・住持の三種の三寶の名字をかかけ、その右側上下

にそれぞれ「萬相莊嚴金剛心」「大勇猛智慧藏心」、左側に同じく上下に「如那羅延堅固幢心」「如衆生海不可盡心」と、都合三行に書し、各々それらを蓮臺の上にのせる。そして全體の上部には三寶を示す梵字六字が横につらねられている。禮拜の仕方は、この前に立つて合掌し「南無同相別相住持三寶、生々值遇頂戴、萬相莊嚴金剛心、大勇猛智慧藏心、如那羅延堅固幢心」と唱へ、次いで「如衆生海不可盡心」にうつると共に身を投じて禮し「生々世々皆悉具足」と稱して終わる。これを朝晝夜の三時に各三返りかえして行うのである。

前著「禮釋」では、これにつき、かかる名字本尊の正當性、その禮拜の典據、三寶並に四心の義理、西方信仰との關係、在家者に於ける禮拜の仕方等とき、後者では更にその徳を詳述している。

さて能歸の三寶はともかく、所歸の四心は、これは「華嚴經」に説く甘種菩提心中の四で、これを以て甘種菩提心を代表せしめるところであり、能所合して以て菩提心そのものを尊重禮拜せしめようとするものである。そしてこの禮拜行は在家行としてすべてにまさり、西方往生についてもその捷徑であるとべる。

ところで我々は本書のなる三年前(建曆二年一二二二)上人に於いて「摧邪輪」三卷、その翌年に「同莊嚴記」一卷が、それぞれ出来ていることを知っている。これらは周知の如く法然上人の「選擇集」に對する痛烈な彈劾の書であるが、全篇をつらぬくものは、専修念佛に於て菩提心を撥去する過に對する憤りである。それは正しく佛道の破滅であるとして、上人の全

身的な護法の情熱と激怒がそこにばくはつしている。即ちそれより幾何もなく本書が成り、三寶菩提心の禮拜を自行し且つひろく出家在家にすめているのは、全くその積極的な對應とせねばならぬ。由來學解に終始する本寺系東大寺華嚴に對し、上人にはじまる末寺系高山寺華嚴の顯著な實踐性が説かれるが、それは「唯心觀行式」や「佛光觀」の如き僧の實踐行のみでなく、「三寶禮」なる民衆的な禮拜行に於て極まると考えられる。

さもあれ、かかる名字本尊の創設は、日本佛教史上、上人に於てはじめてみるところであり、基くところは密教の種子曼陀羅と考えられるが、とにかく明かな文字による本尊形は全くこれを以て嚆矢とする。親鸞の名號本尊、日蓮の題目本尊等がこれにややおくれるものであることはいままでもない。とにかく名字本尊とその禮拜、そして有名な「阿留邊機夜宇和」の提唱等に於てみる上人の宗教運動は、從來の舊佛教の復興なる概念で簡単に律し得ぬ新時代的な性格を具している。我々はこの鎌倉佛教をその單なる傳統の故に、無雜作に新舊に區別することの再認識を求められていると考へたいと思うことである。

### ガンダーラ美術の

#### 思想的背景について

佐々木教悟

ガンダーラ美術の思想的背景をさぐるにあたっては、その美